

「みなとまち」として「職・遊・学・住」を結びつける課題

臨海埋め立て市街地として取り上げた「関内・関外」「潮田」「金沢八景」の3エリアは、東京湾を囲むかたちで湾岸線上に位置している。それぞれの街は個性こそ違え、「人・モノ・情報（文化）」が日々の暮らしの中で活発に行き交う舞台となること

で、21世紀の横浜ならではの住まい方やライフスタイルを生み出し、いく可能性に満ちた「みなとまち」である。

最後に、この3つの「みなとまち」ならではの、「職・遊・学・住」を新しい形で有機的に結びつけるいくつかの動きについて具体的に紹介したい。

古き「横濱」の新たな再生

——まちからの情報と文化の発信

関内・関外地区では、平成15年度末にMM21線が開通し、東急東横線と相互乗り入れることが計画されている。これが開通すれば、「みなとみらい21地区」との一体性が高まり、また渋谷との結びつきが強まること

が期待される。これによって、横浜の臨海都市部全体の求心力が高まるとともに、関内・関外地区の活性化の大きなチャンスになることは間違いないだろう。

こうしたまちの求心力を強めるためには、地域からの新たな情報発信力を高めることが重要となる。

平成12年12月に関内・関外地区の地元の商業関係者が中心となって、専門家や大学の教員、市民団体のリーダーなど幅広いメンバーを集め、「古き横濱IIインナーシティ横濱」（山手や野毛を含む関内・関外地区）の再生を旗印とした「横濱まちづくり倶楽部」が設立された。

このまちづくり倶楽部の目的の一つは、地元商店街組合や企業、市民団体、行政のそれぞれの活動と組織を結びつけることで、個人と個人の心をつなぐの場を創り、横濱にヒューマンネットワークを形成しようというもの。

その活動の一環として、平成13年11月、伊勢佐木町や馬車道、関内マ

リナード、元町などの商店街とともに、若手アーティストと商店街を訪れる市民とが交流によって作品をつくるアートイベント「街頭藝術横濱2001」商店街の美術」を横浜トリエンナーレと連携し、実施した。

また、関内・関外地区に「大学」がないことから、自ら街中のあらゆる場所にさまざまな形態の学びの場をつくりだそうという「タウンスクール事業」を始めた。

最初の試みとして、平成13年7月から12月まで「横濱通養成講座」と題して、関内・関外のそれぞれの街を巡回教室に、老舗の主人から大学教授まで、横浜の達人を講師にしたリレー講座を実施している。

現在のところ、「遊（文化・学）」からのアプローチが中心だが、最終的には、建築、インテリア、服飾、ジュエリー、グラフィックなど、生活全般に関わる製品の開発や商品の組み合わせで「横濱ライフスタイル」をデザインし、提案創造するインキュベーションセンターとなることを目指している。

開かれた研究開発組織による、人・まち・産業技術の新しい融合

一方、大学や研究機関がまちとの新たな関係を結ぶことによって、21世紀の横浜の新しい都市資源としての文化や産業技術を創造しようとする動きも起りつつある。

金沢八景地区では、横浜市立大学が中心になり、地区の市民団体や専門家等と連携した地域シンクタンク「横浜金沢地域総合研究集団」が発足した。この研究集団は、平成8年以來、「金沢八景」ならではの景観や歴史文化、生物環境の保全や、地域経済の活性化や新しい生業の創出などを目的に、調査研究やシンポジウム、イベントのプロデュースなどさまざまな活動を展開している。

これまで、金沢産業団地の企業や金沢八景地区で活動する市民団体とともに「横浜金沢まち博覧会」を開催したり、平潟湾の生き物調査や、戦前戦中の金沢八景の住民の生活史を掘り起こし、子どもたちにわかりやすい形で伝える「金沢百景物語」の出版などを手がけてきた。

近年では、横浜国大や関東学院と

連携して八景地区の子どもたちと商店街との連携を図るワークショップや、ランドスケープや文化の共通性から近隣の鎌倉や逗子、葉山、横須賀などとの市町村の境を越えた広域のまちづくり連携、六浦津を媒介にした韓国の仁川や釜山との「みなとまち」交流を行うなど、地域に根ざしながら世界を見つめて幅広く活動している。こうした集団が生まれてくるのも、大学を持つ「みなとまち」ならでのことだろう。

潮田地区では、鶴見工業高校の(仮称)科学技術高等学校への再編の動きが地域に大きなインパクトを与えそうだ。鶴見工業は昭和11年に鶴見工業実習学校として創立されて以來、京浜工業地帯の要(鶴見小野)に位置して、戦後の復興期から経済の高度成長とともに、横浜の「ものづくり」を支える技術者を養成してきた。

京浜臨海部の企業の技術者や経営者の中にも鶴見工業出身者が多く、潮田周辺の住民にとっても愛着のある高校である。その高校が、近年の情報技術や生命科学などの科学技術の発展と、それに伴う知識・情報集約型への産業構造の転換に対応するために、「科学技術高等学校」へと生

まれ変わろうとしている。

この学校では、従来の専門教育を發展させた機械工学、電気電子、デザイン、建設工学などの学科とともに、情報システムやマルチメディア、環境科学や生物科学などの時代に対応する新しい学科を新設。また地域に開かれた学舎として、小中学校や大学、産業界との連携を積極的に図っていくという。

高校3年間に限定せず、小、中学校段階からの「ものづくり」の人材育成や社会人のリカレントも視野に入れて、生涯にわたった継続的な科学技術の教育の出発点にしていこうというのがコンセプトだ。同校を媒介にして、京浜工業地帯の企業と周辺住民との間の結びつきが強まり、潮田地区そのものが21世紀の職住近接エリアとなる可能性がある。

横浜のみならず、時代の一つの潮流として、職・住・遊・学の機能が分離することこそ望ましいとされてきた20世紀のまちづくりから、職・住・遊・学の機能複合型のまちづくりが見直されつつある。

横浜の「みなとまち」では、次の時代の歴史を創る新たな胎動が起きつつある。